

利根川橋竣功式に列して

省 吾 生

西に峻しい箱根の關所、東に深い栗橋の關所と徳川幕府時代には江戸を警備する兩關門の一であつた陸羽街道筋の利根川に宏壯なる新式の大鐵橋が架せられて九月十四日午前十時から其竣功式が舉行せられた、内務省の湯淺次官、長岡土木局長其他關係官及本會長代理木原少將は都筑專任幹事同導此式に列する爲めに午前八時上野驛發栗橋町に向つた。赤羽を過ぎて荒川の鐵橋を渡る時には殆んど竣功した荒川放水路の閘門を右窓近く眺めて少しの雨でも直ぐに洪水に惱んだ東京市江東一帯が之によつて安全に其災厄から免れるに至るであらうといふうれしい話を聞いた。浦和で乗り込まれた齋藤琦玉縣知事がやうやう色ばんで頭を垂れ初めた秋の田や廣い甘蔗畑を指さしながらされる縣治の話を聞いてゐる内早くも栗橋驛に着く、先刻ボロついでゐた雨は幸に何時しかすつかり止んでゐた。

栗橋驛から利根川新橋の埼玉縣側の袂に設けられた式場まで數臺の來賓迎送用自動車がしきりに通ふてゐる。町の辻々には餘興の舞臺が設けられ着飾つた老幼男女が町一杯にあふれてゐる、堤防の上に幔幕を張りめぐらした清らかな式場で嚴かに鳴り響く太鼓の音を合圖に式は定刻に官幣大社氷川神社宮司足立氏の手によつて始められた。神事滞なく終つて中川東京土木出張所長の式辭、青木利根川架橋主任の工事報告、内務大臣、三縣知事總代、三縣の縣會議長、道路改良會長、關係町村長總代等の祝辭があつた。何しろ遠い古から陸羽街道日光街道の要所として人馬の往來極めて頻繁なるに拘らず廣く且深い此河を纒に小さな船で越してゐるのに過ないのであるから此地方の人々は日々夜々つくづくと其不便を感じてゐたのであるが今や全國に其比を見ない程の立派な大鐵橋が架せられてどんな大増水の時でも平氣で樂々と利根の大流を

渡ることが出来るようになったのであるから此地方の人々の
歡喜は逆も筆舌にあらはすことが出来ぬ、其内でも最も緊密
の關係を有してゐる栗橋町の町長池田氏は其祖先が壽命を受
けて此町を開き代々名主をしてゐた家の人であるさうで今日
のあたり、宏壯な新橋の雄姿を見此盛大な式典に列して其昔
「入鐵砲に出女」などといふ厳しい法度の行はれた時代を回
懐し一入感慨無量であつたらしく祝辭朗讀の聲も感激に打震
ふて聞えた、其祝辭は實に此地方の人士に代つて其喜悅の情
を述べたものであつたと思ふから特に之を本文の終に録する
こととする。式後渡橋式が行はれた、流石に大橋梁の渡橋式
だけあつて目出度い吉例の三夫婦が五組も揃へてあり頗る盛
大であつた、橋は延長約二百九十間有効幅員四間、西半のトラ

スは曲弦うおーれん構東半は直弦うおーれん矮構で威風堂々
として直ぐ上流に在る鐵道の鐵橋と其宏壯を競ふてゐる、昨
秋の大震災にも何等の障害を蒙ることなく起工後約二年十ヶ
月で此新橋を竣功せしめた當事者の苦心と努力は充分に之を
賞讃するに足るものである。橋下を見下せば數多の支流を合
せて來た坂東太郎の流が悠々と流れてゐる、此流の盡きざる
と共に此等の人々の功も永く後の世に傳はることであらう。
行列の人の間にこれから東の岸と西の岸との間に縁談が殖え

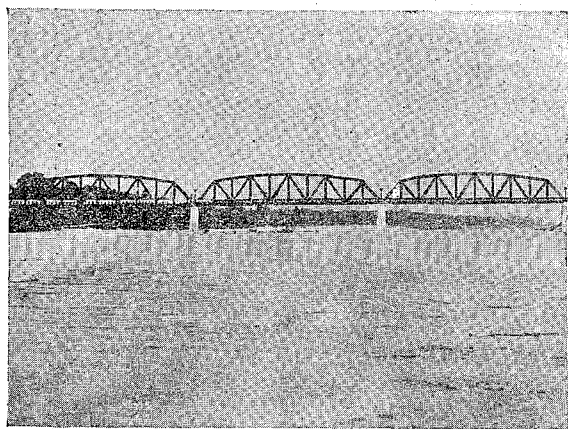
ることだらう、何しろ何時でも自轉車で一走りといふことが
出来るようになったからね」などと語り合ふ話さへ目出度く
渡り初めの人々の滿面には喜の色があふれてゐた。それから
橋を渡つた茨城縣側の袂で三縣知事主催の祝賀會が催された
歸途關所跡の紀念碑や栗橋町の舊本陣跡に陳列された關所
の手形、天保十四年四月十二代將軍家慶日光御社參行列圖船
橋に用ひた虎綱其他の器具、明治九年六月明治天皇御渡船記
録等種々の紀念物につき栗橋町長の熱心な説明を聞いて新橋
の功德がいやが上にも大であらうといふことを感じた。

栗橋町長の祝辭

今茲大正十三年九月十四日四號國道利根川橋竣功開通式ヲ
舉ク、是ヨリ帝都ヲ中心トシタル東北方面ノ交通、國家トシ
テハ軍隊ノ行旅ニ、地方トシテハ車馬物資ノ往來ニ捷徑ヲ得
國防ノ劃策ニ產業ノ施設ニ便利トナリ、事業ノ發展期シテ見
ルヘキナリ、聖代ノ鴻恩文化ノ惠澤豈其德ヲ仰カサルヲ得ン
ヤ、吾人地方民タルモノ此國道橋ノ利便ヲ善用シ、產業ノ振
興ニ努メ其惠ヲシテ彌々大ナラシムヘキナリ。

抑此地利根川ノ交通今日ニ至レル経路ヲ考フルニ、徳川氏
幕府ヲ江戸ニ開クヤ、城下ヲ保護スルノ政策ヨリ、利根川ノ

流域ヲ東漸セシムルノ謀ヲ探リ、當時此地ニ於ケル川流ハ極ニ架設シテ通過スルヲ常トセリ、特ニ近年トナリテハ自動車
 メテ織細ナルモノナリシヲ次第ニ大利根ヲ導キ來リ、一方東ノ開ケシヨリ渡河ノ不便ヲ感ズルコト極メテ多ク、殊ニ客年
 北地方ト江戸トノ交通漸ク繁キヤ栗橋宿ヲ
 開キ渡船場ヲ設ケ驛傳ノ用務ヲ辨シ行旅監
 督ノ必要ヨリ、元和年中關所ヲ此所ニ置キ
 タリ。元來關門ノ制タル交通ヲ監視スルト
 ハ云ヘ、峻坂大河ノ險ヲ利用シテ一ノ防禦
 機關タルノ觀アリ、是封建割據時代ノ施設
 ナルヘシ。明治聖代トナリ海内一統直ニ關
 門ハ廢セラレ、交通ヲ碍スルカ如キモノハ
 撤去セラレタリ、明治九年奥羽御巡幸ニ當
 リテハ、栗橋ニ在リシ高瀬船ヲ御座船ニ仕
 立テ渡御アラセラレタリ、同十四年東北御
 巡幸ニハ近衛工兵カ特ニ架設シタル軍橋ヲ
 御渡歩ニテ渡ラセラレタリ、爾後鐵道ノ利
 開ケテヨリ汽車專用ノ鐵橋ハ設ケラレタル
 モ國道ハ依然トシテ兩岸ノ部落タル栗橋中
 田ノ經營ニナル渡船場ニヨリ僅々數艘ノ小
 舸ヲ以テ用ヲ辨スルノミナリシカ故ニ其用ヲ缺クコト少カラ
 ス、時々軍隊ノ交通スルヤ其大部隊ノ行軍ニ於テハ特ニ軍橋
 左岸は權現堂堤にして



櫻井樹見ゆるは御幸堤

大正十三年九月十四日

關東ノ大震災ニ當リテハ避難救濟ノ
 爲人車一時ニ蟬集シ渡船ニ大困難ヲ
 生シタリシカ、タマタマ河川改修工
 事及架橋工事ノ爲内務省ヨリ出張セ
 ラレ居タル吏員ノ助力ニヨリ辛シテ
 其大輸送ヲ無事ニ終了シ得タリキ、
 今ヤ内務省ノ直營ニヨリ文明ノ粹學
 術ノ極ヲ盡シタル大鐵橋成リ國家的
 至便ナル通路開ケテ微力ナル吾等一
 部落カ經營シ來リタル國道交通機關
 ノ務ヲ終リ其任ヲ國家ニ讓リタルカ
 如キ感ナクシハアラス往時ヲ回想シ
 現在ヲ思念シ轉感慨無量ナルモノアリ
 栗橋渡船場交通發達ノ徑路ヲ述ヘ
 テ祝辭トス

埼玉縣關係町村長總代

栗橋町長 池田 義郎